

第十九回

京の会

解説

鈴木 多美

(イヤホンガイド解説者)

新版歌祭文

野崎村の段

浄瑠璃 竹本 越京

三味線 鶴澤津賀花

ツレ 鶴澤 弥々

二〇二一年十月九日(土) 午後二時半開演

(二時開場/四時十分終演予定)

西池袋 **自由学園明日館** 講堂

入場料(要予約) 二千五百円 (全自由席)

※当日売りはございません

チケットお申込み・お問合わせ

TEL 03(5330)1050 竹本
携帯 090(3809)0516



竹本越京

©福田知弘

<https://www.facebook.com/koshikyo.takemoto/>



koshikyo.ketai140703@ezweb.ne.jp

しんぱんうたざいもん
新版歌祭文 野崎村の段

「解 説」安永九年（一七八〇）大坂竹本座初演。近松半二（一七二八〜一七八六）作の世話物。お染久松の心中を扱った作品の中で決定版となっており、「野崎村の段」の段切りのメロディーは広く知られている。

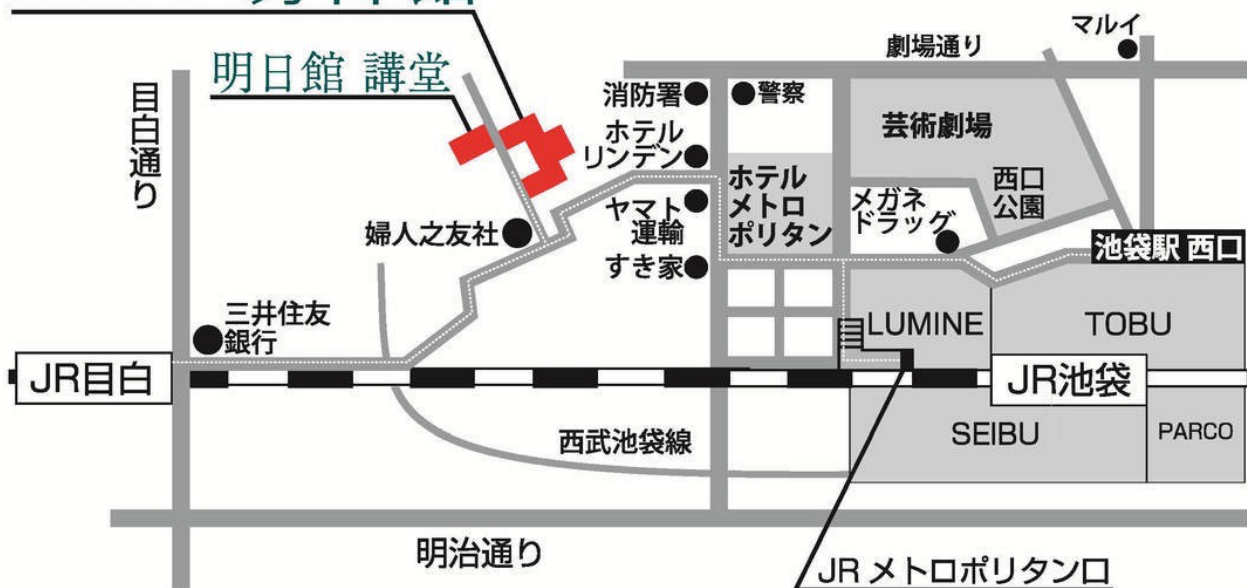
「これまで」油屋の丁稚久松は集金した金を賈金とすり替えられ、野崎村の養父久作の許へ返される。連れて来た手代の小助がその金を立て替えると迫ると、久作は金を渡して追い返す。ここには重病で目の見えなくなった後妻と、その連れ子お光があり、久作は久松とお光を夫婦にしようと思っていた。

「あらずじ」久松が帰って来たのでお光はいそいそと祝言の支度をする。そこへ久松とはかねてから恋仲の油屋の娘お染が後を追って訪ねて来る。二人が心中もしかねないと知った久作は意見をして別れることを納得させ、祝言をさせようとお光を呼ぶ。が、お光はすべての事情を悟り、尼姿となつて出て来る。油屋の後家も外で様子を聞き、お光に感謝し尼への布施として前に久作が渡した金を差し出す。世間の目を憚つて久松は駕籠で、お染とその母は船で大坂へと帰って行く。

新型コロナウイルス感染拡大予防のためお願い

- *来場前に検温をし、37.5℃以上の発熱のある方、体調のすぐれない方は来場をお控えください。既にチケット代を払い込み済みの方には後日返金させていただきます。
- *入場の際は、マスクの着用、手指の消毒をお願い致します。
- *客席には間隔をあけて着席し、会話はお控えくださいますようお願い申し上げます。
- *受付等のスタッフはマスク、またはフェイスシールドを着用致しますのでご理解の程をお願い申し上げます。
- *出演者への面会・差し入れもお控えくださいますようお願い申し上げます。
- *開演中も換気のため、入り口ドアならびに窓を開放致しますので、外部の音が聞こえる場合がございます。

自由学園 明日館



J R 池袋駅メトロポリタン口より徒歩5分
J R 目白駅より徒歩7分 ※駐車場はございません。